ラトローブ大学
プログラム

2018 Summer
August 22〜September 29

池田華香　松本音希子　平川綾音
中島大護　藤井友美　安藤梨里亜　テ゛ィンティトゥホアイ

参加者プロフィール

松本　音希子(団長)
教育学部学校教育課程　２年

初めて訪れるオーストラリアで英語力を向上させると共に、自分の視野をもっと広げたいと思いました。

平川　綾音
経済学部経済法学科　２年

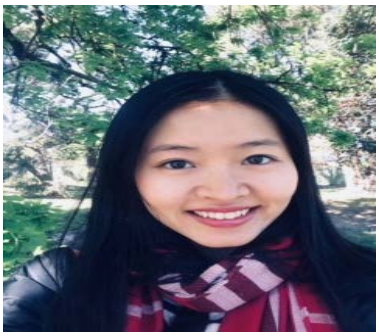
多民族国家であるオーストラリアで様々な文化に触れたい、また、英語力を向上させたいと思い参加した。

安藤　里梨亜
教育学部学校教育課程　１年

会話が英語でもっとできるようになりたかったため参加した。また、ホームステイや現地の学校に通うことで異国の生活の日常に触れたかった。

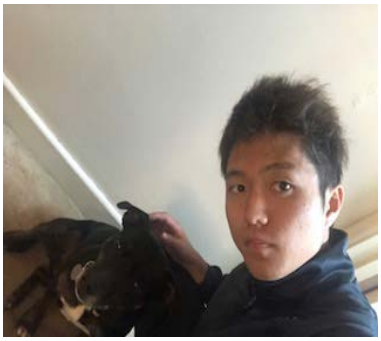
池田　華香
経済学部経営学科　３年

英語を使う国で生活することに興味がありこのプログラムに参加した。英語力の向上だけでなく、コミュニケーション力と自分に自信をつけることも目的だった。



ディン　ティ　トゥ　ホアイ
農学研究科生物資源科学　修士２年

オーストラリアの自然や人々はとても素晴らしかった。様々な文化に触れることができ、いい経験となった。



中島　大護
理工学部機械システム工学科　２年

オーストラリアの豊かな自然に囲まれて生活してみたく、このプログラムに参加した。自らの将来を考える何かのきっかけを探したかったのも理由の１つ。

藤井　友美
経済学部経済学科　２年

多様性のあるオーストラリアの文化に興味があり本研修に参加。また、現地の学生と交流する中で日常的な英語力を向上させたいと思ったことも理由の１つである。

プログラム概要

【期間】2018 年 8 月 22 日～9 月 29 日(39 日間)
【留学先】ラトローブ大学
Plenty Rd &Kingsbury Dr,Bundoora
VIC3086,australia
【内容】
10 週間の正規課程の前半 5 週間に参加した。「はかまなかま」という日本語が好きな人が集まるサークルに参加したり、放課後はバディたちと街へ出かけたりした。

ラトローブ大学について

ラトローブ大学は、オーストラリアのトップ 10 に位置しており、ビクトリア州の公立大学である。メインキャンパスは市街地から 20 キロ離れた Bundoora の敷地にあり、キャンパス内にレストランやカフェなどの設備が充実している。生徒数は約 28000 人で、留学生は約 2500 人である。多くの国からの留学生を受け入れている。

授業

① 9：00～11：00,13：00～15：00　②11：00～13：00,15:00～17:00 の 2 パターンの授業があり、月曜日から金曜日までの週 5 日行われた。クラス分けに関しては海外へ行く前に決められていた。授業内容については、基礎的な文法を習うクラスや、与えられた資料に対し自分の意見を提出するクラスといったそれぞれのレベルごとに違っており、多くのことを吸収できたように思う。今回一番苦労したのは、第 4 もしくは 5 週目のプレゼンテーションだった。テーマを決め、そのテーマを 3 つに分けて述べていく、その先生曰く、「Big,small,smallest」の考えで進めていかなければならなかった。もちろん、原稿を読むことは許されず、箇条書きにしたメモを時折見るといったハードなプレゼンテーションだったが、自分の言いたいことを英語で話す難しさを体験した。また、毎日のように discussion が行われており、常日頃から自分の意見を持っておこうと感じた。

バディとの交流

佐賀大学生 1 人に対し、2, 3 人のバディがつけられた。そのバディたちにはトルコやインドなど様々な国の人々がおり、たくさんの文化に触れることができた。彼らと交流するのは、平日の放課後や、土日の午後の時間がほとんどで、ともにビリヤードをしたり、オーストラリアトリビアのクイズ大会を行うなど楽しく過ごした。また、後半はバディらに計画を立ててもらい、スケートをしにいったり、街へ dinner を食べに行ったりもした。

ホームステイ生活

私たちは一人ひとり違うホームステイの家で生活した。食事は朝と夜の二回で、昼食は学校のカフェや食堂で友達と共にした。各家庭良いホストファミリーばかりだったが、心配性なところが強く、何時に帰宅するのか、誰と出かけるのか細かく伝えなければならない家庭もいくつかみられた。

オーストラリアでの生活

1.交通機関

メルボルンは交通の便が良く、都市部は早朝から夜 12 時ごろまで電車があり、路面電車に関しても同じ時間帯まで動いているので、かなり利用しやすい。しかし、8 月下旬から 9 月中旬にかけて、道路の工事があり、街へ出かけるのに普段の 2 倍の時間がかかった。幸い都市部のショッピングセンターは 9 時ごろまで開いていたので、買い物をゆっくりできた。メルボルンの交通機関はすべて myki カードを利用する。日本のバスに乗る時と同様に、現金を使わず手軽に乗れるので非常に便利だが、無賃乗車をした時の罰金が約 15000 円なので、注意しなければならない。

2.物価

オーストラリアのお金は 1 ドル=約 83 円で、商品のほとんどが日本よりも高い。特にお水に関しては、現地では貴重なものなので、1 本 3 ドル(約 250 円)である。そのため、多くの留学生たちは水筒を持参して大学内のウォーターサーバーで汲んだり、安いお店でまとめ買いするなど、様々な工夫がみられた。

３食事

多文化のため、様々な国の料理店が並んでいた。欧州のパンやパスタ、アジア圏ではインドのカレーや韓国のお肉料理など多くの国の料理を食することができた。メニューはどれも豊富で味も美味しいが、食費が高くついてしまった。

「多文化社会」

教育学部学校教育課程小中連携教育コース初等教育主免専攻 2 年 松本音希子

私はラトローブ大学プログラムに参加して、オーストラリアの多文化社会を学んだ。事前研修のときにオーストラリアが多文化　社会であることは学んでいたものの、実際現地に赴いて自分の肌で体感した多文化社会は想像を超えるものだった。まず、オーストラリアには純粋なオーストラリア人というものがほとんど存在しないということが現地の友人から聞いてわかった。ハーフ、クウォーターは言うまでもなく、それ以上の人種が混合していることが当たり前だということもわかった。私のホストファミリーもオーストラリアで生まれ育ったものの、バックグラウンドはトルコで、ホストマザーとファザーの両親は 1970 年代 にトルコから移民してきたそうだ。前シドニー事務所所長補佐である甘利昌也氏によると、オーストラリアは英国の系統を引くアングロサクソン系住民によって構成される社会であると考えがちであるが、実は総人口の約 4 分の 1 が海外で生まれた者で構成された多文化社会であり、主要都市であるメルボルンは、ギリシャ系住民の人口がギリシャの国外で最も多い都市であると述べている。実際オーストラリアに 5 週間滞在して、様々な人種の人々に出会い、様々な国の食べ物を発見した。メルボルンの街に行って食事をするとなると、トルコ料理店、中華料理店、韓国料理店、日本料理店など様々な国のレストランがあり、ラトローブ大学内にも　同じように沢山の国の食べ物が販売してあった。メルボルンの繁華街内にあるビクトリアマーケットでは、マレーシア料理、ベトナム料理、韓国料理、中国料理と全てアジア圏の国の屋台が出店されており、多くの人で賑わっていた。マーケット内には食べ物だけではなく、アジアの国の特産品も販売されており、太極拳や獅子舞などのその国独自の催し物も行われていた。次に、言語にも多文化社会がみられた。人種が混ざっているオーストラリアの人々にとって、二言語または三言語話せることは　当然のことだそうだ。実際に、私がラトローブ大学で出会った友人は、第一言語が英語、さらに第二言語が中国語、広東語、トルコ語というように、自分の両親のバックグラウンドの言語が話せて、バイリンガル、トリリンガルが多くいた。さらに、多文化社会であるオーストラリアでは様々な宗教を崇拝する人々がいる。オーストラリア統計局が６月２７日に発表した最新の国勢調査（２０１６年）の結果（英語）によると、無宗教と回答した人は２９・６％で、この１５年間でほぼ倍増した、　カトリック（２２・６％）を超え、オーストラリアで最も多い宗教グループとなった。英ガーディアン紙（英語）によると、無神論者や世俗主義者、不可知論者らが無宗教のカテゴリーに含まれている。無宗教、カトリックの次には、聖公会が１３・３％で続き、プロテスタントのオーストラリア連合教会（長老派、メソジスト、会衆派の合同）は３・７％だった。これらキリスト教の教派の後に、イスラム教（２・６％）、仏教（２・４％）、ヒンズー教（１・９％）、その他（０・８％）、シーク教（０・　５％）、ユダヤ教（０・４％）などの各宗教が続き、９・６％は該当なしと回答した。よって、オーストラリア内にはイスラム教を崇拝する人々のためにお祈りをする施設が設けられていたり、ほとんどのレストランやカフェで、ベジタリアンやビーガンの人のための特別なメニューが用意されていたりと多文化社会に適応した街づくりが成されていた。このように、オーストラリアでは街の至る所で多文化社会に触れることができた。日本ではできない体験ばかりで、驚くことも　数多くあ

ったが、そのひとつひとつがいい経験になった。様々な国のバックグラウンドを持った友人ができたことによって、異なった生活習慣や食事などを知ることもできて、勉強になることばかりだった。これまで日本で海外の宗教や生活などを学んできたが、実際にその文化の中で暮らす人々に話を聞いた方が理解しやすかったし、疑問に思ったことも詳しく知ることができた。多文化社会で生活するオーストラリアの人々は自分以外のバックグラウンドを持つ人に対して差別や偏見をすることもなく、素直にその人を受け入れており、非常に良いことだと実感した。オーストラリアに留学して自分の知らなかった世界を肌で体感することができた。

インド料理店で様々なバックグラウンドを持った友人と撮った写真

「留学を通して」
経済学部経済法学科 2 年 平川綾音

私がラトローブ大学プログラムに参加しようと思った理由は、英語の能力を上達させたいと思ったことと、多民族国家であるオーストラリアで様々な文化に触れてみたいと思ったからです。

オーストラリアに行く前は、自分の英語が通じるか、5 週間現地で生活していけるかとても不安でしたが、実際に行ってみると、ホストマザーもクラスメイトもバディもとても親切で、充実した時間を過ごすことができました。

オーストラリアでの生活をホームステイ・学校・バディの 3 点に分け、述べて行きたいと思います。

まずは、ホームステイです。私のホームステイ先は、ホストマザーが 1 人だけの家でした。ホストマザーはとても優しく、一緒に夕飯を食べたり、コーヒーを飲んだりしながら、たくさん話をしました。どんな話かというと、オーストラリアの英語の発音やオーストラリアの文化についてたくさんのことを教えてくれ、その他にも家族のことや自分の人生、考え方についてです。また彼女は幼い頃にマケドニアから家族で移住してきた方で、なぜオーストラリアに移住したかや、当時の移民に対する差別などについての話もしてくれ、オーストラリアの移民事情について学ぶことができました。

次にクラスメイトは、中国や韓国、香港、オマーン、イスラエル、コロンビアなど様々な国から英語を学びにきており、様々な文化が混在するクラスでした。週末にクラスメイトの家でホームパーティをしたり、放課後にシティに行ったりと、仲を深めながら、様々な文化に触れることができました。クラスメイトは皆、学校に文法やライティングのスキルを身につけるために来ているという感じで、スピーキングやリスニングのスキルが高く、クラスメイトの会話についていけないということも多く、戸惑ったり、落ち込むこともありましたが、英語を学ぶいい刺激になりました。また、クラスメイトは、結婚して子供がいる人や自国で大学を卒業した後、オーストラリアに勉強しにきている人など様々で、学びに年齢は関係ないということを感じました。

最後にバディは、日本語に興味があったり、日本語を勉強している現地学生で、放課後や週末の時間を利用してたくさんの交流をしました。バディは、日本のことについてとてもよく知っていて、また、日本語もとても流暢でとても驚かされました。大学の日本語の授業や日本語サークルに参加させてもらったり、放課後や週末にいろいろなプランを立ててくれたりとメルボルンの街の様々なところに連れて行ってもらいました。交流していく中で、外国人から見た日本とはどのようなものか知ることができ、日本人にとっては何気ないものが、海外の人から見ると興味深かったり、不思議だったりするというのを知り、オーストラリアで改めて日本の魅力に気づくこともありました。

オーストラリアで、様々な人種や宗教の人と出会い、5 週間の中でコミュニケーションを取っていく中で感じたことは、皆が自身の国や文化に誇りを持っていることです。オーストラリアは移民の国で、様々な人種や宗教の人がいます。ホストマザーやバディと交流していく中で、オーストラリアに住んでいても、自身もしくは先祖の故郷である国や文化を大切にしていることを実感しました。また、自分自身も母国である日本を離れ、多文化に触れることで、自分が日本人であるというアイデンティティーを確立することができ、日本に対する誇りを持っていることに気づかされました。その一方で、日本について知らないことも多くあることにも気づかされました。今回の留学を通して、英語に対する意欲の向上はもちろんのこと、多文化について知りたいと思うとともに、自国である日本についてもさらに知識を深めようと思います。

クラスメイトの家でホームパーティをした時の様子

「外国で学ぶこと」
教育学部学校教育課程小中連携コース英語科１年 安藤里梨亜

私はラトローブ大学のプログラムに参加して、２つのことを学びました。
１つ目は多文化社会についてです。歴史でオーストラリアは多民族国家だということを習い、自分で理解しているつもりでした。でも実際に行ってみると聞いていたこと以上に学べることがたくさんありました。個人個人が他民族を尊重しながら生活しているのを知ることができ、とてもいい経験ができたと思いました。また多民族国家の影響で、町のあちらこちらに様々な国の料理のお店があり、すしやラーメンなど日本料理のお店も多く、私が今まで行った国の中で１番日本を感じられる国だと思いました。他国の人もその人自身の国のお店があり、そう感じることができると思います。文化を配慮した料理がどのお店にもあり、誰もが住みやすい街でした。
２つ目はオーストラリアの大学についてです。日本の大学はほとんどの生徒が高校を卒業して働くか大学に進学するかで、大学を選んできた人ばかりです。でもオーストラリアは年齢関係なしに学びたいことがあるから学ぶといった自分の目的をみんながきちんと持っていると感じました。学生の中には、高校卒業後に働いて自分でお金を稼いでから学びたいことを学んでいる生徒、学校と仕事を両立しながら学んでいる生徒、働いていたけどまだ学ぶべきことがあると自分で感じて学んでいる生徒など立派な学生が多くて私も見習おうと思いました。様々な考えの学生がいることで話を聞くだけで日ごろから刺激を受けることができました。授業中の様子も日本よりも積極性があり、質問、発言が多くみられ、また話し合いをする場面でも誰もが意欲的に話し合いに参加しているのを見て感心し、見習うべきだと思いました。

このプログラムの中で驚いたことが大きく分けて３つあります。１つめは、運転免許についてです。オーストラリアには自動車学校というものがなく、親などに教えてもらうことで、免許をとることができます。自動車学校に行って専門の人に教えてもらわないと免許を取ることができない日本とはとても大きな違いです。私はそれを聞いたとき、親から教えてもらうのは不十分で、毎日事故が起こりそうだと感じましたが、滞在期間中には何も起きなかったので、そういう制度もありなのかなと思いました。
２つめはカードやシステムの発達についてです。オーストラリアの人は、ほとんどの支払いをカードでします。読み取りもカードを機械にタップするだけなので、日本でいう IC カードのようにとても素早い支払いができていてとても驚きました。また割り勘など代わりに支払いをしてくれた人がいたとき、日本だとその人自身に現金で渡すことがほとんどですが、オーストラリアではその人の銀行の口座に直接振り込んで支払っていました。そしてそれはわざわざ銀行に行くのではなく、携帯で口座の詳細を入力するだけでできるので、その場で簡単にできていました。日本よりも進んでいるカード社会に一番の驚きをおぼえました。
３つ目は公共交通機関についてです。メルボルンには移動手段として、バス、電車、トラム（路面電車）、タクシー、Uber がありました。でもバス、電車、トラムは時間通りに来なかったり、途中でしばらく停止して到着が遅れたりするのは日常茶飯事でした。私が面白いと感じた話は、ある人は 30 分に一本のバスを 30 分待っても、1 時間待っても来なくて、待ち続けた結果、バス 3 台が団子状態でやってきたという話です。他国の事情を聞いて、ほぼ時間通りに動く日本の公共交通機関のすばらしさを再発見しました。
海外に行くことで、その国について体験的に学べることはもちろんですが、日本と外国のそれぞれの良さに気づけることがいい点だと思います。またオーストラリアは文化的なことを学

ぶ面で、とてもいい国だと思いました。これからはもっと多くの国で多文化の共存が求められると思うので、参考にできる部分もたくさん持っていると感じました。

la trobe university

「短期海外研修を終えて」
経済学部経営学科　3 年　池田華香

私はラトローブ大学プログラムに参加して、約 5 週間という短い期間でしたがとてもいい経験をさせていただきました。そこで当報告書では、メルボルンの良さと日本との国民性の違い、言語教育の仕方、英語の重要性とこれからの目標について書きたいと思います。
はじめに、メルボルンの良さと日本との国民性の違いについてです。今回私たちが通ったラトローブ大学は、オーストラリアの南に位置するメルボルンという都市にあります。大学周辺からメルボルンシティまでは電車で約 40 分とアクセスも良く、ほどよい人口や建物、自然があるところでした。私がメルボルンに着いて最初に感じたことは、やはり自然の多さです。あらゆるところに自然保護区や大きな公園があります。野生のカンガルーは公園で見ることができ、日本では見たことがないような鳥もたくさんいました。さらに、自然が多いため空気が透き通っており、夜はきれいな星空を眺めることができました。週末は、ほとんど毎週と言っていいほどメルボルンのシティへ観光や買い物に行きました。シティは大学の周辺とはまた少し雰囲気が異なり、近代的な高層ビルとヨーロッパ風の歴史的な建物が融合した都市のようで、シティを散歩しながら建物を眺めるだけでも楽しめるようなところでした。また、オーストラリアに行って日本との国民性の違いを 2 点感じました。1 点目は、気軽に話しかけてくれる人が多いことです。朝、学校へ行くためにバスに乗る時は、バスの運転手さんが「Good morning」と笑顔で話しかけてくれます。お店の店員さんは、入店した時やお会計の時に笑顔で話しかけてくれます。さらに、道がわからなくて尋ねると、ほとんどの人が笑顔で対応してくれます。このように、人々が気軽に話すことができるのはいい習慣だと思いました。2 点目は、おおらかさです。いい意味ではおおらかと表現できるのですが、時間にルーズなところは慣れるまでとても困りました。電車は基本的に時間通りでしたが、たまに遅れることがありました。バスは 10 分前後するのは当たり前です。そして週末、佐賀大学生とラトローブ大学のバディの生徒でシティへ行くために待ち合わせをした時、日本人は 5 分から 10 分前には集合しているのに現地の学生は時間ちょうどか少し遅れてくるのが当たり前でした。学校の授業の始まりもこのような感じで、先生は時間ちょうどか少し遅れてくるのが当たり前でした。この経験から、日本人の 5 分、10 分前行動の精神や公共交通機関の時間の正確さをあらためて感じました。
　次に、言語教育の仕方についてです。ラトローブ大学で英語の授業を受けて、先生の元気のよさや教え方が日本の英語の授業と全く違うと感じました。私が今まで日本で受けていた英語の授業は、みんな机に座って先生が前に立って一人で話すというのが基本でした。しかし、オーストラリアでは、ペアワークや動きながら英語で話す練習など、座学というよりは実際に英語を使ったり体を動かしたりして学習していくスタイルで楽しみながら英語を学ぶことができました。また、先生もただ話すだけでなく様々な表情や動きを交えながら話すので、分からない単語があってもなんとなく理解することができ、とても楽しい授業でした。そして、空き時間にラトローブ大学の生徒が受けている日本語の授業にも参加させてもらいました。授業中ノートをとっている生徒や時間はほとんどなく、実際にペアで会話をして声に出すことで学習するスタイルがとても印象的でした。生徒が退屈だと感じる授業よりも楽しいと感じる授業のほうが身につくと思うので日本も見習う必要があるのではないかと考えました。
　最後に、英語の重要性とこれからの目標についてです。私は今回、英語圏の国へ初めて行きました。私は英語レベルがまだまだ低いので、自分の思いを伝えたくても何と言おうか考えているうちに発言のタイミングを逃してしまうことが何度もありました。前にも述べたように、オーストラリアは気軽に話しかけてくれる人が多いのでもっとスムーズな会話ができればよかったなと少し後悔しています。また、将来仕事をするうえでも英語ができれば仕事の幅はとても広がると思いました。そのため、この約一か月の貴重な経験を無駄にしないためにもこれからもっと英語を勉強して、将来的には仕事で英語を活用できるレベルにし、様々な国の人々と関わりたいなと思いました。そして、お金を貯めてまた海外で生活したいです。

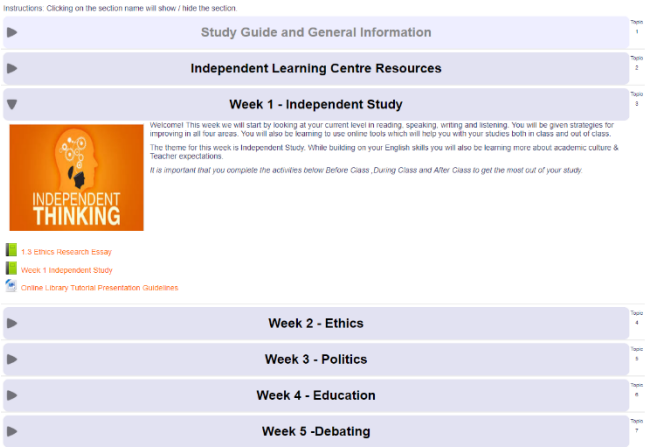
今回ラトローブ大学プログラムに参加して、楽しい経験をしたことはもちろんですが、自分の課題やこれからやりたいこと、目標が明確になりました。この経験を就職活動につなげていきたいと考えます。

ラトローブ大学の学生とアイススケート

「オーストラリアに行って気づいたこと」
農学研究科生物資源科学専攻　M2　ホアイ

私はラトローブ大学プログラムに参加して、５週間でAcademic Writing という授業コースを受けました。コースは１０週間ですので、私は、半期でしか受けられませんでした。このコースの目的は、研究において、アカデミック英語や文献検索やプレゼンテーション等といった必要なスキルを身につけることです。ラトローブ大学院に進学するために、殆どの留学生はこのコースに参加しなければなりませんので、かなりハイレベルのクラスでした。下記の通り、コースの特徴と良かったことについてお話ししたいと思います。

1、Online resources
こちらの大学では、オンラインリソースを十分に利用することが効率的な学習方法の一つはないかと思います。なぜかというと、日本と違って、教科書と授業で配った資料の方ではなく、コースの情報や授業内容やタスク等は全部オンラインでみられます。授業前に、オンラインで資料の動画を確認し、クラスの共有サイトに挙げられた資料の問題についての自分意見を提出しなければなりません。共有サイトに、クラスのメンバーのご意見と先生のフィードバックもありますので、実際の授業を行う前に、先生とクラスのメンバーと交流する機会が多いと思います。また、クラスで資料にある新しい概念と内容を先生に教えてもらいますので、オンラインで事前学習しないと、実際授業が行われる時に、クラスのメンバーや先生が言ったことに追いつけないと思います。



LTM Moodle という授業データのサイトより

また、大学の図書館やVictoria State の図書館でも無料で、電子版の最新本をアクセスすることができて、非常に便利です。

2、Learning method
オーストラリア大学に通って、一番良かったのは、勉強方法を教えてもらったことです。日本にいた時は、与えられた教科書を読む・理解する・覚えるというルートで勉強したら、試験に対して何とかなると思っていましたが、こちらでは、そういう勉強方法ではいけないそうです。ある Critical thinking の授業で、大学のレベルでは、knowledge（知識）understanding（理解）application （運用）だけではなく、Analysis（分析）Evaluation （評価）と Creation（創造）といったスキルも求めてられるそうです。つまり、学生は新しい知識を得ることだけを目指すだけではなく、与えてくれた知識に対して正しいかどうかを分析し、判断していく上で、新しいことを発見するということです。ですから、授業の前に、しっかりテキストを読んで、判断してか

ら、クラスでディスカッションの活動が行われます。他の学生と意見交換することで、自分の理解がより深まります。また、テキストを何回も読んで、覚えるのは本来の勉強ではないと教えてくれました。そこで、私が面白いと気づいたのは、″rereading”というスキルと “recalling”というスキルについてです。テキストを何回も読んで、重要なポイントをハイライトする″rereading”はあまり良い勉強方法ではないそうです。代わりに、理解したことを、教科書やノートを見ず、recall したほうが、効果的に学習できると教えてもらいました。外国語の学習する時も、新しい単語・文法を勉強したら、その日に、思い出して、事例を作ったりしたほうが良さそうです。私も、効果があるかどうか、試してみました。

1. Diversity

オーストラリアはどんな国だと問われたら、私は、多文化の国だと答えます。大学の範囲でも、多文化ということを感じました。多文化の環境でいられるには、その人の宗教・文化・意見を尊敬することが大事ではないかなと気づきました。私が受けたクラスの殆どの学生は、ネパールとインドから来ていました。日本と違って、皆はクラスで自由に意見を出したり、先生に聞いたりしました。あるグループディスカッションの時に、GMO（遺伝子組み換え）を禁止するかどうかという ethics の問題を与えられました。クラスのメンバーはそれぞれ違う国の視点から、意見をはっきりにして、反対か賛成か強く言いました。例えば、日本では、GMO の商品は認められてないですが、インドからすると、食料の問題で、GMO を認められているそうです。そこで、分かってきたのは、違う視点からですが、なぜそういう方向を選んだかという正確な証明と理由を調べることは大事です。

このように、5 週間の勉強は無事に完了することができました。短期留学でしたが、自分の視界を広げることができて、ある物事に対して新しい見方を取ることができました。今回の短期留学で、Henry Miller が言った言葉が分かるようになりました。‘’One’s destination is never a place, but rather a new way of looking at things“ （人の目的地は場所ではなく、物事を見る新しい道だ）

「世界を体験した 5 週間」
理工学部機械システム工学科 2 年 中島大護

「世界を感じてみたい。」今回のプログラムへ参加することを決めた理由はそこにある。これまでの人生で、東京、大阪、京都など日本の主要都市へは行ったことがあり、それぞれ素晴らしいところだった。しかし、だんだんと日本を狭く感じ、今すぐに世界へ飛び出したいと思った。日本を出ることは初めての体験で、外国人とあまりコミュニケーションをとったことがなかったが、このタイミングで挑戦しないと一生後悔すると思い、決断に至った。私がこの 5 週間で感じたことを 3 つ挙げることにする。

1 つ目は、環境の変化が自らを大きく変えてくれたことだ。日本にいるとき、クラスで発言するのを怖がっていた自分がいた。なぜなら、周りの空気を読み、人に合わせることが一番大事であると信じていたからだ。ところが、いざ外国へ行ってみると、授業で発言することは当たり前で、クラスメイトとグループトークをするなど、自分の意見を常に発信していく積極性を学んだ。この学びにより、discussion 等で発言の機会をさらに増やしていかなければならないと強く感じた。一人ひとり、違う価値観や考えを持っているため、意見がぶつかり合う機会は多くある。その時、恥ずかしさを捨て、多くの人との交流を持つことが本来の自分を引き出すことにつながる。無理をして人に合わせなくても良い、と気づかせてくれたことに対し、感謝をしたい。

2 つ目は、人々の心の温かさである。これに関しては多くのエピソードがあるが、そのうちから 2 つに絞って述べることにする。1 つ目は、大学内で昼食を買っていた時のことである。注文を終えて支払いのときに、財布のチャックが詰まり、開かなくなった。後ろに列ができており、慌てているところを、店員さんが、「No warries,slow down.(心配しないで。落ち着いて。)」と声をかけてくれた。私はその一言により安心し、時間をかけて財布を開くことができた。ちょっとした気遣いのできる人に私もなりたい。2 つ目は、街へ買い物に出かけた時だ。もともと海外に行く前、携帯に頼らず過ごしたいと決めていた。もちろんホームステイ先の家と、学校の wi-fi は利用させてもらったが、それ以外の場所に行くときは、何の連絡手段も持たずに過ごした。前置きが長くなったが、この状況で、すれ違う人々や店員さんを訪ね、目指す場所へと向かった。そのときに頼った人々の心の広さに私は深く感動した。私の日本人なまりの発音や、間違っている文法でもなんとか理解してもらい、行きたい場所へのルートを笑顔で丁寧に教えてくれたことは、これから先も忘れることはないであろう。「日本人は優しい」私もそう思う。だが、本当の優しさとは、心の中で「大丈夫？」と聞くことではなく、目の前で助けが必要な人にすぐに救いの言葉や手を差し出せることだと私は考える。
今回自分が感じた親切心を、今度は日本で困っている外国人にフィードバックしていきたいと思う。

3 つ目に、私が感じたメルボルンについて述べようと思う。まず、多文化社会ということもあり、アジア系の人やヨーロッパ系の人が多かった。特に街中で気づいたことは、中華系の店舗が約 6,7 割を占めている。このことから中国人が仕事を求めてオーストラリアにやって来ている背景が読み取れた。次に、ショッピングセンタ

ーなど、閉店時間がとても早いことに驚かされた。日本のスーパーの閉店時間は夜 9 時など、仕事や学校帰りに寄ることができるが、メルボルンでは午後 5 時など、日本では考えられない早さで店じまいをする。色々調べてみると、外国人は家庭や自分の時間を大切にするため、なるべく残業はせず、残った仕事は次の日の早朝に終わらせるそうだ。彼らの集中力はおそらく並大抵のものではないだろうと推測できる。そして、彼らの時間の使い方に強く魅力を感じた。私も将来メリハリをつけ、集中力を高めて仕事に向き合いたいと思う。最後に、街の景観は私の心を弾ませた。私は景色を観ることが好きである。カメラで撮るわけでもないが、何も考えず、観ているだけですごく心が癒されるからだ。メルボルンの街は日本と違い、デザイン性に富んだ建物や、かつてあった自然を残そうとする文化があった。何もかも見たことのない景色ばかりだったため、ただ歩くだけでも充実した時間を過ごせたように思う。

メルボルンの街の風景

今回の留学から学んだことは数知れずある。現地でたくさんの人に出会い、毎日の出来事に深く心を揺さぶられ、常に考えさせられる 5 週間はあっという間だった。そして、得られた経験をこれからの人生に生かしていきたい。留学をするにあたり、家族や祖父母、親戚の方たちなど周りのサポートに感謝をしたい。

「オーストラリアの多国籍文化に触れてみて」
経済学部経済学科 2 年 藤井友美

私は、SUSAP のラトローブ大学プログラムに参加して、オーストラリアの多国籍文化に触れることで、今まで気づくことができなかった多くのことに気づくことができ、外国に行くことで自分自身を成長させることができました。まず、さまざまな国の人と交流することで、今まで自分がいかに偏見や先入観にとらわれてきたのかが 分かりました。私の大学でのクラスは、日本人は私だけで中国や韓国など東南アジアの国の学生が多くいました。最初は、これらの国に関して良くない噂ばかりを耳にしていたため、クラスの人にあまり良い印象を持っていませんでした。しかし、彼らは私が授業の内容が分からなくて困っているときに、いつも助けてくれ、日本人 1 人で不安だった私を優しく受け入れてくれるとても親切な人ばかりでした。放課後にはクラスメイトの家でバーベキューをしたり、買い物に行ったりして多くの思い出を一緒に作ることができました。多くの国籍の人々と交流を深めていくうちに、趣味や興味があることなど多くの点で通じるものがあり、今まで直接話したことがなかったのに勝手に間違った印象を持っていたということに気づきました。日本では、それぞれの国の印象だけでその国の人々の性格を勝手に決めつけ、偏見の目で見てしまう人が多いと思います。そのため、もっと日本人は外国人と積極的に関わって、国のイメージにとらわれるのではなく、個人の性格を見ることができるようにならないといけないと思います。そして、オーストラリアでは多くの国籍の人々が共に同じ社会の中で生活していたことがとても印象的でした。学校でもお祈りの部屋の施設のようなさまざまな宗教に対応した施設があり、国全体が他国籍の文化を受け入れていると感じました。これから、日本でも東京オリンピックに向けて、グローバル化が進むことが予測され、外国の文化を積極的に受け入れる姿勢が必要だと思います。そのためには、日本もオーストラリアのように、外国人と日本人が共に生活しやすい雰囲気を作ることが大切だと感じました。また、このプログラムで日本語に頼ることができない環境の中で生活することで、困難なことを諦めずにやる粘り強さと、新しい環境でも自分の力で乗り越えようとする力を身につけ、自分自身を成長させることができました。ホームステイ先や道を尋ねるときなど多くの場面で英語しか使えない状況に出会い、伝えたいことをうまく伝えられず何度も心が折れそうになりました。だけど、外国に行くことで誰にも頼れない状況の中で自分の力だけでうまくやっていける力を身につけようと思ってこのプログラムに申し込んだため、うまく英語が話せなくても諦めずにコミュニケーションをとろうと思い、積極的に話しかけることを心がけました。やはり自分が言いたいこと全てを英語で伝えることはとても難しかったが、携帯の辞書を使ったり身振り手振りで説明したりして一生懸命伝えようとすると、聞いてくれる側も真剣に聞いてくれたため、なんとかコミュニケーションをとることができました。このような経験を通して、社会人として必要な力を得ることができ、人に頼ってばかりで難しいことをすぐ諦めてしまっていた自分を変えることができたと思います。今回、5 週間オーストラリアの多国籍文化の中で生活して、実際にグローバル社会を体験し、オーストラリアの人々の外国人の文化や習慣などを受け入れる姿勢にとても刺激を受け、外国に対する自分の考え方を見つめ直すことができました。また、日本語に頼ることができない環境に身を置くことによって、失敗を恐れずに積極的に行動することができるようになり、自分に自信を持つことができるようになりました。この短期留学を通して学んだことを生かせるように、より多くの国に視野を広げて、今のグローバル社会のなかで自分はどうあるべき

なのか、世界平和に近づくにはどのようなことが必要なのかを考えていきたいです。そして、今回の留学で現地のラトローブ大学の学生やホストファミリーなどお世話になった方に対する感謝を忘れずに、私も外国人を快く迎え入れられるような人になりたいです。

バディーとフリンダース駅にて